

よろずは

平成二十七年

五月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

たしかなる 使を無みと

情をそ 使に遣りし

夢に見えきや

万葉集 卷十二 二八七四 作者未詳

【意識】

頼むにたる使いがいないので、わが心を使いにしてあなたのもとへ送りました。夢に私が見えたでしようか。

夢で逢いましょう

この歌は、いつ・どこで・だれが・どんな状況下で詠んだのか、まったく記録が残っていません。ただ、『万葉集』には「古今の相聞往来の歌の類」下巻（巻第十二）の「正に心緒を述べたる歌」の中の一詩として載せられていて、恋の贈答歌の一首であり、心情を率直に表現した歌であると思われ、それがわかります。

古代の日本では、一夫多妻制で男性が女性の家へ通っていく通い婚が行われていたと考えられています。別居婚が一般的であったともいわれ、そんな時代には、手紙や歌が、恋人たちの重要な通信手段であったことだろうと思います。

ところがこの歌では、信頼に足る使いがいないので自分の心を使いに出した、と書いています。そうすれば相手が自分のことを夢に見ると信じていたようです。他にも、相手の恋する思いが強いので自分の夢に相手が登場した、と詠んだ歌などがあります。

古代の人々にとって「夢」は、いわば魂の世界の現実というような感覚があったようです。【万葉古代学係】